

上代日本語における母音組織と母音交替

泉 井 久 之 助

一 序

八世紀の記紀萬葉を中心とする上代の文獻において、そこに漢字をかりて表記せられた日本語が、その漢字の使用上の區別ないし群別によつて、キ・ヒ・ミ・ケ・ヘ・メ・コ・ソ・ト・ノ・ヨ・ロ（および古事記ではなおモについても）の、十二ないし十三の音節がふくむ母音イ・エ・オに、それぞれ甲乙二類の存在を暗示することを、宣長の古事記傳における示唆によつて發見し、これを精査して、門下の石塚龍麿（一七六四—一八三三）が「假字遣奥山路」（一七九八以前に成ると傳えられる）を述作したことは、現在、言語學界國語學界における著しい事實である。龍麿の功績は、時をおいてその後、大正期に橋本進吉によつて發見再考せられ、ついで池上禎造（「古事記に於ける假名『毛・母』について」、國語國文、昭和七年十月號）、有坂秀世（「國語音韻史の研究」昭和十九年刊、「上代音韻攷」昭和三十年刊）、また書紀を中心とする大野晋（「上代假名遣の研究」、昭和二十八年）等による研究の進展によつて、問題は次第に明確化せられ、従来みとめられた/a/ /i/ /u/ /e/ /o/の甲類五母音のほかに、/i/ /e/ /o/の乙類三母音がみとめられ、あわせて八種の母音は、それぞれの音聲的な音價の考證を加味して、音韻的に、

後舌的 /a/ /o/ /u/

上代日本語における母音組織と母音交替（泉井）

中舌的 /i/ /ë/ /ö/

前舌的 /i/ /e/

の三部に分類せられ、その/a/ /o/ /u/を男性母音、/ö/を女性母音、/i/を中性母音として、ウラル諸語の大部分、アルタイ諸語のほとんど全部、および痕跡的に朝鮮語にもみとめられるごとき、いわゆる「母音調和」の現象が、上代日本語にみとめられることも、次第に闡明せられて来た。しかもこの母音調和において、男性母音をふくむ音節は互にいわゆる結合單位中に結合してあらわれやすく、女性母音/ö/は男性諸母音とは結合が困難であり、ことにその/o/とは原則として全くこれを避け、中性母音/i/は男女両性の母音をふくむ音節と自由に結合することができたと考えられ、そして/e/ /ë/ /i/は、直接、母音調和に関係がなかつたとせられて来たのである。

ウラル諸語、アルタイ諸語の大部分において、母音調和の現象そのものが今日も行われることは事實である。しかしその調和の様相は一樣ではない。ウラルおよびアルタイ諸語の範圍にふくまれる各言語ごとに、その様相はさまざまであることも多く、各言語においても、たとえばウラル諸語に屬するオスティアク語のごとく、その方言ごとに大きい差異を示し、この差異のうちには、母音の男女の二性、または右のごとき男女中の三性の母音による対立と調和の基準によつてはすでに律することができないほど、音韻組織をいちじるしく崩壊もしくは推移せしめたオビ河の支流、カズィム河畔に行われる方言のようなものもある（篇末註参照）。

しかし、たとい痕跡的にもせよ、前舌母音と後舌母音とを對立的に取り扱おうとするのは、ウラル諸語、アルタイ諸語の全體を通じて、母音調和といわれる現象の第一則である。

かかる母音調和の現象は、すでに十分な姿を保つものではなかつたにしても、八世紀の日本語には確實になお痕跡をとどめていた。しかしその組織は、かならずしも、/i/のみを中性とするものではなかつたと、思われるのである。

本篇においては、慣例にしたがい、平假名は乙類の母音をふくむ音節を示し、片假名は甲類のそれとともに、併せてまた甲乙の區別を示すことのなかつたその他の音節をあらわす。

二 母音組織の圖式

A

上代文獻にあらわれる日本語の/a/ /o/ /u/の三母音が、いわゆる男性母音として同種に屬し、これをふくむ音節が、結合單位(語根または語幹)の中において、直接たがいに結合しやすいことはいうまでもない。

a—o、またはo—aの結合については、

アヲ(青)・アソヰビ・アソヰバシ(遊)・カモ(鴨)・カモ(助詞)・マヨ(眉)・オヤ(親)・オヤヰジ(同じ)・ソ
ラ(空)・ソナヰフ(具、古事記)、等、

など、多數にその例をあげることができる。

o—uまたはu—oの結合についても同様である。

オク(奥)・オクヰル(遲・送)・タヰコムラ(手胼)・ヨル(夜)・ヲツヅ(現)・スソ(裾)・フト(太・大)・タヰ
フトヰシ(尊)・ツドヰフ(集)・ツノ(角)・クモ(雲・蜘蛛)・クロ(黒)、等。

さらに、a—u、u—aについては、

アム(虵)・アユ(鮎)・カムヰカゼ(神風)・アス(明日)・サル(猿)・ウカカヰヒ(窺)・ウカヰツ(穿)・クハヰ
シ(美)、等、

があるばかりでなく、a・o・uを通じるものとして右の「コムラ」のごとき語例も存在する。(コムラは或いはコム

ラと分たるべきものかも分らない)。要するに、a—o—uは、音節結合の母音線(略して結合線)をなすといふことができる。この結合線は、音聲學的に、最廣かつ中舌的なaから最狹かつ最後舌的なuにいたる一線である。

一方、aはまた、a—e—iの結合線を構成する。たとえばa—eおよびe—iについては、

アセ(汗)・カケ(鶏)・カゼ(風)・カセ(梓)・アメ(飴、倭名抄)・サネ(核・眞實に)。エダ(枝)・ヘタ(邊)、等、があり、e—iおよびi—eについては、

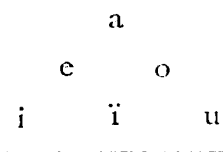
セミ(蟬)・メヒ(婦負、地名)・ヘキ(人名)・ネリ(練)・セリ(芹)。イネ(稻)・イヘ(家)・ヒメ(姫)・エヒメ(伊豫ノ國)・ヒレ(肩布)・ヒレ(鱈)・ミヘ(地名)、等、

をあげることができる。a—iおよびi—aに關しては、「アキ」(秋)・「タニ」(谷)・「タキ」(瀧)、および「チカ」(近)・「チカラ」(力)があり、この種の例はきわめて多く、a・c・iのすべてを通じてふくむものとして、「カレヒ」(乾飯・加禮伊比の約)・「カレヒ」(乾鱒の約、倭名、加良衣比・加禮比)、の固定的合成語、或いはこれもまた合成語ながら、「ミカネ」(御金嶽またミミガネともせられる)がみとめられる。結合線a—e—iは、音聲的に、最廣かつ中舌の母音aから、最狹かつ最前舌的な母音iにいたる一線である。

頂点を共通にする二つの結合線a—o—uとa—e—iのそれぞれ末端、uとiとの間にも、また次のような結合線が成立する。

ウシ(牛)・ウシハナフ(失)・ウシ(大人)・ウシハク(領治)・ウチ(内)・クキ(洞、クキ「岫」とは一應別)・クシ(櫛)・クニ(國)・スミ(墨)・イヌ(犬)・キク(企玖乃池)・キヌ(衣)・アキヅ(蜻蛉)・ミヅ(水)・ヒツ(櫃)・ニフブニ(にこやかに)、等。

このうち「クキ」は、或いは動詞「クク」(潜)の連用形による名詞形として、除外すべきものかと思われる。



/i/は中舌母音、最狭のもの一つとして、圖において縦にはaの下、横にはi—uの線上に来るものである。この結合線上においてi—iおよびi—iの結合は、その例は少ないけれども、なお、

- キビ (吉備、國名または穀名)、・シヒ (人名)・ヨジヒ (人名)・ヒチキ (地名、比治奇の灘)・シ
- キ (地名)・キリ (霧)・キシ (岸)、等、

を見出すことができる。このうち「ギリ」は動詞「キル」(萬十七卷、霞立春日之霧流)の活用的派生形として第二次的に固定したものかも知れない。なお、「キヂ」(木道、紀伊へゆく道)は、「キ」と「ヂ」の合成語であつて、結合單位ではない。従つてここに入れることはできない。

一方uとiについて、u—iの順においては、

- クキ (岫)・ツキ (月)・ツキ (槻)・ワキ・ツキ (脇机)・オク・ツキ (奥城、或いはオク・ツキ「城」か)・スギ
- (相)・ツツキ (山城の地名)・ミ・ツツキ (御調)・ムキ (樞、麥はムギ)・ユキ (齊忌)、

がある。このうち、「ツキ」(槻)・「スギ」(相)・「ムキ」(樞)の「キ」は或いは「木」にあたり、「ツキツキ」(脇机)・「オクツキ」(奥城)の「ツキ」も、むしろ「ツキ」であつて、四段動詞としての「ツク」(築)の連用形とすることはできないと思われる。「ツク」の連用形は、「ツキ」であつて「ツキ」ではない。しかしそれらは——殊に樹名に關しては——きわめて早く固定して、その合成語であつたことも忘れられる程度に結合單位化していただであらうと考えられる。

i—uの順による結合單位の例は(ほとんど)見出すことができない。u—iの順においても、そのiはほとんど常に音節「き」にあらわれ、「き」が結合單位の末尾に立つことに注意しなければならない。これは「き」が單音節の獨立語として合成形の末音節に立つたか、あるいは稀に活用の一形としてあらわれたかを、示すものと思われる。

以上の結合線 a—o—u、a—e—i、i—i—u は集つて三角形 a i u を構成する。この三角形の領域をわれわれは

領域Aと名づける。

Aにおいて、結合は、單にa—u、a—i、i—uの線上に行われたばかりではない。またそれぞれの頂點から、對角線上の中點に向う線についてもまた行われた。

たとえばa—iについては、サキ_{II}デ(さき手)・ナギ(葱・水葱)・ハギ(萩)・アキ(阿騎、地名)・サキ(沙紀、地名)・マキ(椈)・ミ_{II}マキ(崇神天皇)・イマキ(地名)・ワキ_{II}イラツコ(和紀郎子、人名)・カヒ(甲斐、地名)・カミ(神)等がある。このうち、植物名「ハギ」・「マキ」等については「き」(木・樹)との古い合成語と見るべきものもあるかと思われる。書紀にあらわれる「タビ」(乗炬)は萬葉に見える手火(炬)であつて、「タ」(テ・手)と「ビ」(火)に分たるべき合成語であろう。i—aの順に結合する例には、わずかに「みな」(皆)がある。

i—oについては、シロ(白)・シノ(小竹)・シホ(鹽)・イトコ(親愛の人)・イト(絲)・イモ(妹)・ニコ(柔)・ニホ_{II}ドリ(鳩)・ヒコ(彦)・ヒモ(紐)等があり、o—iについては、オキ(沖)・オシ(地名)・オミ(臣、古い合成語か)・ヲシ(鴛鴦)・ヲヂ(老翁)・ヲチ(遠)・トジ(刀自)・ドチ(達、接尾辭)・モチ(穉)・モミ_{II}ヂ・モミ_{II}ヅ(黄葉)・ヨリ(助詞)等がある。このうち「ヒコ」は「日子」として分析せらるべき可能性があり、「モミ_{II}ヂ」は萬葉においてただ二箇所、古事記におけるごとく「も」によつて、「母美知」としてあらわれるところがある(總索引單語篇一一八〇)。しかし書紀・萬葉においては、すでに毛・母の區別が失われていたことは、周知のごとくである。

u—eに關しては、「この_{II}ウレ」(梢)・「クエール」(蹴)・「ムレ」(丘)・「ユエ_{II}ニ」(故)・「スエ」(末)・「フネ」(舟)・「フエ」(笛)・「ヌテ」(鐸)・「ツネ」(常)等がある。クレ(暗)はクル(暮)の名詞的派生の一形として、全體を結合單位と見るべきではないと考える。「ヌテ」も、その「ヌ」が「ナ_{II}ス」・「ナ_{II}ル」(鳴)・「ナ_{II}ク」(泣、鳴)の「ナ」と交替するものとすれば、「ヌ_{II}テ」(鳴手、柄のある鈴)として、まさに合成語と見るべきものであろう。

e—uの順に關しては、「エツリ」(蘆葦—木舞)・「エグ」(植物の名)・「ネブ」(合歡木)等があげられる。このうち「エツリ」は、構成的に、「エ(枝)〓吊り」として分析せらるべきものであるかと思われる。

つぎに三角形の三邊上の中點は、たがいの間にも結合關係が見出されることがある。たとえばo—iの間には、「ユヒ」(戀)・「ヲギ」(萩)が見出される。しかし「ユヒ」は動詞「ユフ」による一形として立つ可能性が強く、「ヲギ」もまた乙類の母音を持つ「木」との合成語かと考えられる。「よもぎ」(余母疑、萬葉では「よモギ」)もまた同様であろう。i—oの順の例は乏しい。一方eとi相互の間、eとo相互の間に、結合單位が構成せられる場合は見出されることが少ない。「ソテ」(袖)は結合單位として疑問の形であり、「トネ」(川名)はその來由に日本語として疑問がある)。これには、あとに述べるような理由があつたかと思われる。o—eに關して「オレ」(爾)の語があつても、これは「ワレ」(我)、「タレ」(誰)、「コレ」(是)、「それ」(其)のごとき一連の代名詞に共通の構成要素「レ」をふくむものとして、語源的には「オレ」と切らるべき合成形である。また「セト」はセト「瀬・門」であり、「セユ」(夫)は「セナ」(夫)の「セ」をふくむ「セユ」(兄—子)であろう。

以上の事實と語例は、その道の人にとつて周知のことである。

これらの語例の頻度から見て、結合線が優越的に鮮明なのは、三角形の三つの外邊である。その語例は上掲のほかにも多い。しかしそのうち、iのiおよびuに對する結合關係に語例より見て不安定なものがあつたのは、iの顯現が當時すでにiと合一して、新しく/i/を構成する過程にあつたからであろう。この/i/は從來の/i/を時に/i/とし、大部分の/i/をすでに/i/に化していたと思われる。同じ事情は、三角形の内部において、a—i相互の結合關係にも干渉して、本來a—i相互の關係であつたものの多くを、a—i相互の結合關係に移し、その結果、a—iの結合線が特に鮮明にせられたと考えられる。o—i相互の關係についても同様にいうことができる。その多くがo—iの關係に移した結果、前者o—i相

互の關係は右に見たごとく、いちじるしく安定性を缺くものとなつて、反對に*o*—*i*相互の結合關係が、語例上にうかがわれるように、特に強化せられて來たのであらう。

この*o*と*i*の結合は、後部母音と前部母音の結合である。この結合關係が、母韻調和の原則より見て、本來異例的であることは、同様の結合を示す*o*—*e*、*i*—*e*のそれぞれ相互の結合が、結合單位的に確實にあらわれることの、きわめて少いことによつても知ることができる。

三角形Aの領域は、本來、主として中・後舌母音の領域であつた。

しかもこの領域において、前部母音*e*・*i*をふくむ結合線のあるものが、優越的なものの一つであることは、Aの性質に對する新しい改變、新しい結合關係の導入があつた結果によると思われる。

B

殘る母音*ö*と*ë*については、結合單位的に、右の*o*および*i*に對する*e*のごとき、稀少關係がみとめられる。

*ö*は原則的に、Aの領域における後部母音*i*に對する單位的な結合關係がない。「こきダ」(幾許)・「こきシ」(幾許)に對して、「こキタク」・「こキバク」、「ここダク」・「ここバ」(幾許)があるのを見れば、その「こ」と「き」の間に、結合關係における中斷があつたのは明らかであらうと思われる。

*ö*と*u*・*o*との關係についても同様に行うことができる。この三つがそれぞれ結合關係的な様相を示すものには、「とブサ」(鏞?) 樹梢)、「オよヅレ」(妖言)がある。しかしこの二語とも、その構成の様式がいまだ明瞭ではない。

一説によつて/*i*/は結合關係に影響するところがなかつたとすれば、「ウシロ」(後)・「ムシロ」(席)・「クシロ」(釧)もまた、*u*と*ö*との結合と考えられるかも知れない。しかしこれらは或いは「シロ」(代)、「之呂」との合成であり、或いはその「ろ」は、「オギゝろ」(蹟)・「とこゝろ」(所)・「もこゝろ」(如、古事記金澤本「母許呂」)にあらわれる古い接

尾辭であり(オク「奥」・とこ「床」・モユ「如」)、一般に右にあらわれる「ろ」は取りはずして考えることができるものとも考えられる。「ヲそ」(嘘)に對する「ヲそゝろ」(嘘)の「ろ」も同様であろう。「モユ」(對者、聳、一緒)は右の「もこゝ」と後述するとき交替關係にあつたものであつて、「シこゝめク」(醜めく)の「めク」、すなわち後世に「メク」としてあらわれたものとも交替形をなすものであつた。

このおと。の關係も少々複雑である。一般におは、圓唇的母音との結合關係において、同じ乙類のおと結合することがもつとも多い。

こぞ(去年)・こと(事・言)・こと(如)・こと(琴)・こも(菰)・ころ(頃)・ころも(衣)・との(殿)・とも(艦)・とよ(豊)・もの(物、古事記)・よそ(外)・こころ(心)・ところ(所)・もと(本)等、

の例を多數にあげることができる。

これに對して、一見、おが甲類のオ列音。と結合するかのごとくに思れるものにも、

オと(音)・オこゝス(起)・オそ(鈍)・こホヽル(凍)・そホヽチ(沾)・そホリ(山名)・とホ(遠)・のホヽル(登)・ホこヽル(誇)・ホろボヽス(亡)・ホととヽギス(時鳥)、

などその數は多い。しかしこれらはすべて、乙類の、こ・そ・と・の・よ・ろ・(および古事記では「も」)の各音節以外の音節との結合である。すでに母音調和の現象が痕跡的にもせよ、みとめられる以上、起源的に、「以外」の音節を乙類から除外すべき理由は、原則的に、存在しない。もしこの「以外」の音節においても、その以前の時期に甲乙二類の區別があつたとすれば、従つて更に、右にあげた「オと」以下の例語において、そこに立つ母音の乙類が本來的なものであつたとすれば、これらにおける一見甲類のごとくに考えられるオ列の母音は、すべて、乙類のものとして、その以前は、たとえば「オと」は、/o:po:/として考えらるべきものであつたらうと考えられる。これをもし正しいとすれば、おは後部母音

と結合關係に立つことは、原則として、本來なかつたことになる。

しかしこのöは、領域Aをかこむ一邊、a—e—iの結合線上の各點に對しては關係を持つことができる。

öとaについては、確實なものに、「アそ」(親稱)・「カそ」(父)・「マろ」(圓)・「とガ」(咎)・「とハ」(永久)・「アどもフ」(率)・「そバ」(楓椋)・「タのム」(頼)・「マそ」(全)・「チャル」(臥)がある。「ナゴリ」(名殘)は萬葉卷四、「鹽干の名凝^{ナゴリ}飽くまでに」、卷六、「難波瀉鹽干の奈凝^{ナゴリ}よく見てむ」などにあらわれるものをその原義とすれば、大言海が説くように、これを「波残り」として解することも、他に例はないにせよ、或いは可能かも知れない。しかし本來、これは、「のこり」(残り)に對する交替形であろうと思われる。一般にöのaとの結合の場合には少ない。

öとeの結合を示す單位の例も、比較的少ない。しかし「こエ」(聲)・「ネもころニ」(慫慂)・「ヲそネ」(小確)・「イツとセ」(五年)・シケこシ(醜)等があげられる。地名「こせ」も、むしろこのように乙類の「こ」によつてあらわれるのが普通とせられる。しかし「是」の「これ」は「こレ」であり、「其」も「そレ」である。

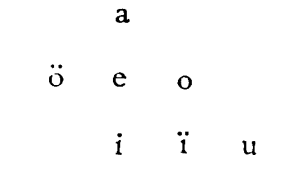
öはiと結合することがもつとも多い。

イヤチこ(灼然)・イごのフ(罵)・イキどホル(憤)・シこ(醜)・キそ(昨夜)・ヒこヅル(引づる)・ヒと
 (人)・ヒと(壹)・イのチ(命)・シこリ(頻)・シとと(巫鳥)キこス・キこユ(聞)・ミどり(綠)・いろ
 (色)・ナハシろ(代)・こシ(腰)・こシキ(甑)・とり(鳥)・とき(時)・ときハ(常盤)・とシ(年)・よヒ
 (宵)・よミ(黄泉、字鏡「與彌還」)

このうち、「イごのフ」の構成と意義についてはなお疑問があり、「イのチ」は助詞「の」をふくむ合成語であつたかも知分らない。「よミ」の読み方は、假に字鏡より借りて來た。上代の古典においては一般に「よもツ」の形のみがあらわれ、「よミ」はただ「黄泉」と意譯して書寫せられているからである。

以上、 \ddot{o} の結合関係を見れば、

- 1 領域Aにおける後母音/ \ddot{o} ・ \ddot{u} ・ \ddot{i} /とは起源的に、原則として、結合しない。
 - 2 しかしAの一邊、 a — e のそれぞれとは少数の例において、 i とは多くの例において、結合することができる。
 - 3 そしてさきに見たごとく、Aは原則として、後母音の非口蓋音的な領域である。
 - 4 しかも \ddot{o} の音價は口蓋的圓唇音である。圓唇性のない a — e — i の線上に来ることができない。
- 従つて、 \ddot{o} は、 a — e — i の結合線のかたわらにおいて、三角形Aの外側になければならないことになる。



これをまとめて上のごとく圖示することができるであろうと思われる。

\ddot{o} は a — e — i 線上の各點と結合することができた。しかしその中舌的な a との結合の例數には、限定性が強い。 e との結合の場合の少ないことが、何の原因によるかは分らない。しかし i との結合は豊富であつて、上代文證の範圍がなお廣範であり得たならば、その結合の例は更に増加せしめることの可能性を思わしめるものがある。 \ddot{o} は、従つて、 i の音色を多分にふくむ口蓋的な音價を帯びていたものと思われる。

更にいまひとつの \ddot{e} は、不安定なところをもつ音韻である。「ナガ \ddot{e} イキ」(長息)が「ナげキ」(嘆)となり、「タカイチ」(高市、地名)が「タけチ」となるように、この母音には \ddot{a} の融合から來た廣い \ddot{a} に類する音價もふくんでいたかと思われる。またカ行下二段動詞の連用形は、その成立の經過から見て、語幹末尾の \ddot{a} に、 \ddot{i} が加えられたものと考えられる。そして上代の文獻にあらわれるその形は、たとえば「向く」・「任ク」に對する「ムけ」・「マけ」のごとくに、乙類の \ddot{e} による「け」である。この「ムけ」・「マけ」はまたそのまま名詞形としても用いられた。要するに \ddot{e} は、 i の音色をふくむ口蓋音的な性質を示すものであつたと思われる。

この性質をもつ^てもまた、領域Aにおける後部母音u・o・iに對して直接的な結合關係を示すことがきわめて少い。「ウケ」(槽)は獨立の名詞であるよりは、むしろ動詞「ウク」(受・承、下二)の連用形による名詞的派生形(「受器」)であつた可能性がつよく(しかし大言海は特徴的なその分析の方法によつてこれを「大^ウ^ツ筒^ツ」とする)、そして「ウケ^フ」・「ウケ^ヒ」(祈誓)・はその動詞的擴張子 *clausissement* (または接尾辭)「^フ」による第二次的派生による形であろう。ただ地名としての「ケツ」が紀の舒明に「氣菟^ツのワクコ」としてあらわれる。この「ツ」は或いは「津」であつて、全體は單綴の二語による合成語であつたかとも考えられる。「ウ^ル」(上)は一説によれば「大^ウ^ツ邊」と分析的に解釋せられる。この語の成立と構成にはなお疑問がある。「ウ^メ」(梅)は、本來の日本語詞ではなかつたかも分らない。

ëがoおよびiと結合關係をもつ例を見出すことには、やや困難があろうと思われる。

要するに、ëが、u・o・iと直接に交渉をもつことは、原則的にきわめて乏しいといわなくてはならない。この事情はöの場合と同似的である。

しかし、ëがaと結合單位を構成する例は相當に見出すことができる。

ヤ^ケ(宅)・ミ^ルヤ^ケ(屯倉)・ナ^ル(甌)・タ^ル(柁)・タ^ケ(竹)・タ^ケ(岳)・サ^ケ(酒)・サ^サゲ(荳角)・サ^ハバ^ル(五月蠅)・カ^メ(龜)・カ^ゲ(蔭・光)・ヒ^カゲ(蘿)・ア^メ(天)・ア^メ(雨)・マ^メ(豆)・サ^ル(助詞)・ナ^ル(苗)・ケ^タ(柁、字類抄)。

このうち甌(なべ)を意味する「ナ^ル」は「ナ」(食品)と「^ル」(甌、すなわち、イツ^ル甌「嚴甌」、クカ^ル甌「探湯甌」の甌)との古い合成語であり、「サ^ケ」も一方に「サ^ミ」(さ身)があるのを見れば、接頭辭「サ」との古い合成語かとも考えられ、その「^ケ」は「ミ^キ」(御酒)の「^キ」と後述する交替關係における母音であつたかとも思われる。同様に、「カ^ゲ」(光)も、「わたる日の加^カ氣^キにきほひて」(萬葉卷二十)における意義に關しては、「天照るや日之^ヒ異^ケに干し」(卷十六)

の「ヒのケ」(日の光)と異るところがない。この「ケ」が「カゲ」の「ヶ」(または「け」)と交替關係に立つ單綴の獨立語であつたとすれば、「カゲ」も「カ」(「とヲカ」)、すなわち「十日」の「カ」と「け」による古い合成語であり、單一の結合單位とはみとめがたいであろう。しかしこれらは當時においてもすでに熟成した合成語であつて、その結成度のかたさは結合單位のごとくであつたと思われる。

これに對して、*ë*が*i*と結合する場合は、*a*との場合ほどにも見出すことができない。

イけ(池)・イめ(夢)・ニる(苞苴・贅)。

*ë*と*i*の結合單位を例示する語例が少ないのは、資料の範圍がせまく限られているためもあるけれども、またこの*ë*が、その結合單位の大部分において、すでに早く*e*と合一、あるいは*e*に吸収せられていたためかと思われる。従つて*ë*と*e*との結合する單位形式を見出すこともむずかしい。

*ë*が*ö*と結合する例には、書紀に「こめ」(米)がある。「苔・蘿」を意味する語はまた一般に「木ヶ毛」であつたとせられる。倭名抄もまたこれに従っているが、その讀み方として示すのは「古介」である。これは「ヶ」ではなくてはならない。「ヶ」をもつて、八世紀における正しい形とすることができるならば、*ë*の*ö*に對する結合の一つの例とすることができよう。*ë*が*ö*と結合する例の乏しいのは、やはり、*ë*が早く*e*に吸収せられたためと思われる。

以上によつて、全般的に*ë*が、音韻組織に占める位置を、次のごとくに考えることができる。

- 1 *ë*は領域Aの非口蓋の後部母音*ö*・*u*・*i*と、確實な單位において、結合することが少ない。
- 2 *ë*は*a*・*i*のそれぞれと結合がある。
- 3 しかし領域Aの内部は原則として後母音の非口蓋的領域である。
- 4 *ë*のすべてが*ai*から來たとは考えられない。しかし*ai*から來たものをもふくむことは、*ë*がほとんど*ä*として、*e*

より広い口蓋的母音であつたことを示すと思われる。しかし \ddot{e} は、 $a \cdot e \cdot i$ と同様に非圓唇的である。

従つて \ddot{e} は、 $a - e - i$ 線上、 a と i との中間にあつたと考えられる。われわれは領域Aに對して、線 $a - i$ と點 \ddot{o} とをふくむ領域をBとなづけることができる。 $a - i$ の線はA・B兩域に共通である。Bは、 $a - i$ の線をはなれるに比例

A u して圓唇・口蓋的な性質をます領域である。

結合關係的に、 a および i は、それぞれ、爾余のあらゆる母音と單位的に結合することができ
る。八世紀の日本語において、結合關係的にいわゆる母音調和をみとめるならば、 a もまた i と
ならんで、いわゆる中性的な母音であつた。限られた文獻から見出されるその語例の絶對數は少
ないけれども、本來前母音的な $\ddot{e} \cdot e$ もまた、中性化し、A・B兩域に對して、單位的な結合關
係を左右ほとんど平均的に持つ（あるいは持たない）ことを示している。

この母音組織はやや特異である。 $a \cdot i$ を上下の頂點としてそれぞれ左右の領域の各點と結合せしめつつ、しかも a の
結合線は $a - o - u$ においてもつとも強く、 i のそれは \ddot{o} にむかつてもつとも強くあらわれる。ともにかつて鮮明にはた
らっていた母音調和の流れの名残りを示す現象であつて、調音的に中舌的な a は、結合的には後部母音（男性母音）として
はたらいっていたことを示し、 i は、前部母音として、本來、いわゆる女性的な結合關係にあつたことを示している。しか
も、 i がその他の場合において、 a と結ぶことが、 i の他の結合に比して多いのは、 a が中性的な性質を帯びてからのこ
とであつて、この結合關係の増加は、もつとも顯著に a の中性化をものがたる現象である。かかる二つの中性母音が、同
時に一方において、結合關係の流れにおける右のような片よりの現象を示すことは、すなわち、文獻以前に曾て存在した
更に鮮明、かつ、一貫的な母音調和の組織と活動との名残りをここにとどめていることである。 a の中性化、 i の中性化、
この二重の原理によつて調和の組織は不徹底になつて來た。のみならず八世紀までに、母音調和の現象そのものも、その

産出的な活動力を失い、ただ結合單位の一部のものにおいて、新しい傾向（無調和への）によつて次第に歪曲、整理あるいは没却せられつつ、痕跡的にのこされて來たにすぎなかつた。

編纂の上では古事記より八年ばかり遅れるにすぎなかつた書紀に「モ」と「も」の區別が失われて、「もの」は「モの」、「とも」（伴）は「とモ」となつているのを見れば、甲乙の區別の喪失は書寫の上でも急激に「モ」の上に及んで來たことがわかる。「モ」の甲乙を區別しないことは、ここに新しい型の、おそらくは當時における清新な「新」假名遣いにおける新しい現象の一つとなつて來たのである。とすれば他の場合の甲乙の區別も、少くともその一部は、單に書寫の上における一種の歴史的假名遣いとして、文語意識における記憶的な現象になつていたと、考えられなくてはならない。従つてそれは固定的であつた。甲乙の區別がいわゆる結合單位中のみ保存維持せられて、活用する部分と接續する小辭（助詞）に原則として、及ぶことがなかつたのも、このためであつた。甲乙の區別をもない音節、たとえばア行・ハ行・ワ行のそれぞれオ列の音節は、假名遣いに固定する以前、音聲的にもすでにこの區別を失い、結合單位においても、區別は音韻論的にさえ存在しなかつたと考えられる。

三 母音組織の意味

1 その圖式と結合關係

すでにひずみが増えられ、そこに行なはれるもの、より嚴重な、調和の方式は大きくゆるめられていたけれども、なお當時の言語における結合單位の構成は、さきの圖式に従つて行なわれていた。この組織はゆるやかである。圖によつて明らかのように、a—iの共通線を中間にさしはさんで、A・Bの領域が明瞭に對立することを示すのは、Aのo・u・iと、これに對立するBのöにすぎない。つまりo・u・iに對してöが對立して、たがいに同一結合單位に立つことを

避けていたのである。八世紀において、単位の結合には、この對立を避けるだけで、あとはほとんど自由に結合關係がつくられていたとすることができる。

Aの領域は線 a—ë—e—i をふくんで圖の右半分である。ここではöをさけるだけで、その外は自由に結合を保つことができる。前部母音に屬する「め」も、後部母音の「ヅ」と結合して、「めヅ」ラシ」の語を造り、またこれを保つこともゆるされる。「イキどホル」(憤)の語も、一方に「イキヅク」(息をつく・嘆息する)、イキヅカシ(嘆かわしい)の語があるのを見れば、「イキ」と「とホル」(通)に分けて構成せられた語であろう。とすれば、「イキ」はA B中間の結合線上に構成せられた語であつて問題はなく、「とホル」も「ホ」が書寫的に甲乙母音の區別をすでに示しえない音節であつたとするならば、もとはB域的に「とほル」であつて起源的に問題がない。「イヤ」(彌)・「ヤけ」(宅)の語も全體がA・Bの兩領域の中心線に屬して構成せられ維持せられている。「イクサ」(軍)もA域における構成である。A・Bそれぞれの領域は、中央のa—iの線を共通に保つていたのである。各域の單位構成能力は高い。

書紀・萬葉にあらわれる「モの」(物)・「モと」(本・下)の語は、一見、勝義におけるA域の母音と、勝義におけるB域のそれとの單位的結合のように見える。しかしそれは古事記において「もの」・「もと」としてあらわれ、もともと全體的にB域における構成による語詞であつた。「アども」フ」(率)は、一見、A B兩域の混用のように思われる。しかし萬葉にあらわれるこの語には一個所、も(母)の假名によつて「み船ごを『アどもと』立てて」とするところがある。「もの」・「もと」をすでに「モの」・「モと」としたこの時期には、もとの「アども」フ」もすでに大方は「アども」フ」に統一せられつゝあつたのであらう。——「ヲろガム」(拜)は、その甲乙の區別をすでに示さなかつた「ヲ」がもともと「を」/wa/であつたにちがいない。「甚・痛」の義において上代には「イタ」・「イト」・「いと」の形があらわれる。「イタ」・「イト」はA域の構成であり、「いと」はB域の結合であり、しかも同じ萬葉において「イト」・「いと」の兩形を見出

すことができる。しかし萬葉では「イト」と「いと」の間に意義的に小さいながらあきらかな差異を見出しえないこともない。「イト」は「非常に・實に」の意義に用いられることが多い。「ふな乗りてわかるを見ればイトもすべなし」(卷二十一)。「わかればイトもすべなみ八たび袖振る」(卷二十二)では「實に」の意味合いが強い。「イト」はこれに對して「非常に・あまりに(も)」の含みが強く、「ほととぎすイトとねたけくは」(卷十八)、「梅の花いまだ咲かなくイトと若みかも」(卷四)、「秋風の吹かむを待たばイトと遠みかも」(卷十九)では、「イト」は別に存在する「イト」のキテ」(「甚」除きて)、殊に・とりわけて、あまりにも)にきわめて近い。「イタ」・「イタ」モ」・「イト」・「イト」はすべてイタ(痛)に關係する同源の語にちがいない。しかし他がA領域の構成による語であるのに對して、「イト」はB領域の構成によつてゐる。「イタ」と「イト」とが、意義的にドイツ語の *ver-seh-en* (傷つける) における *seh* にあたるとすれば、「イト」はむしろ *zu seh* の意義をもつてゐる。この差異を上代、もしくははいわゆる上代よりも更にその以前の人たちは、意義範疇的な差異と考へて(もしくは感じて)、二つをA・Bの二つの領域にふり分けたのであろうか。しかしその振り分けには、單なる結合關係の場合とは異つて、かすかながらもaとoとの對立があらわれ、ここに、aを非中性的に男性母音としていたところの、さらに前代の母音組織による構成の名残りが、すでに浮び上つて來るのである。

2 圖式と母音交替

“ A・B間の交替

「透音」

事實AとBの兩領域にふり分けられた同じ意義類に屬する語には、まずaとoとの對立をふくめて、意義的範疇を異にするものが多い。

「ヲそ」(woso)は萬葉にも鳥について「オホヲそ」ドリの語があらわれ、この「ヲそ」は輕率を意味する語とせられる。しかしこのB域の語に對して、A領域の構成による語として「アサ」(淺)がある。

「ア」は古典において「吾」の意義をになつてあらわれる。これに對する「オ」の「ono」は、むしろ「自身」(ラテン語 *ipse*, 英語 *self*, ハンガリー語 *mag-a-am*)である。

「ツキ」(月)と「とき」(時)は、本来、互に無關係な語ではないと思われる。しかしその意義的範疇から見て二つの意義の間には明瞭な範疇的對立がある。これに應じて前者 (*tsuki*) は結合の構成においてA域に、後者 (*toki*) はB域に屬している。

ここに注意すべきは語末の *i* と *i* との関係であつて、普通、ウラル諸語、アルタイ諸語において、母音調和の現象にあらずかるとき、*i* は前部母音(従つていわゆる弱母音または女性母音)に、*i* は後部母音(従つてまたいわゆる強母音または男性母音)に屬するのが原則である。アルタイ諸語のうちトルコ(チュルク)諸語は、その母音調和の現象において固くこれをまもることが多い。まもるといふよりは、この古い状態を維持しているのである。*i* を中性母音として、これを男女兩性の母音との結合關係に入らしめる言語は原則として *i* と *i* との區別を失い、*i* を *i* に組み入れ、または *i* のうちに吸収せしめた言語である。蒙古諸語は一般に *i* を中性母音とする言語として知られている。しかしその古い状態においては *i* もまた別に存在したことは、方言的調査に基く比較研究によつて說かれるところであり(たとえば A. Meillet et M. Cohen (éd.): *Les langues du monde*. Paris 1952. p. 376; N. Poppe: *Introduction to comparative Mongolian studies*. Helsinki 1955 の特に p. 84. および、泉井編「世界の言語」東京=大阪、一九五四、三三三頁。Louis Hambis: *Grammaire de la langue mongole écrite*, I. Paris 1945. §10) また蒙古文語の正書法の歴史を精細に調べることによつても確實に知ることができ(В. Г. Владипуров: *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка*. Ленинград, 1926. 二一六頁以下、殊に二二二頁)。フィン語の *i* の *i* への合一は、十六世紀末の正書法の改革によつて、表面にあらわれて來た。ウラル諸語のうち、フィンランド語、ハンガリー語は、その母音調和において、*e* と *i* とを中性母音とすることによつて知られている。たとえばフィンランド語

vero (食事、税)、ontelo (うしろ、くぼみ)、onsi (くぼめる)。またハンガリー語 *fordit* (まわす・かえす)、*fiu* (男の子)、*vezna* (薄い、瘦せた、乾いた) 等。この最後の語例にあらわれる *a* は、音価としては開いた *o* にあたり、母音調和的には常に男性母音として取り扱われる。しかしフィンランド語、ハンガリー語をふくむいわゆるウラル諸語におけるはじめの母音調和の現象は、*i* と *i*、*e* と *e* を分ち、それぞれの前者は男性母音、後者は、女性母音としてあらわれるものであり (J. Karjainen: *Развитие и скрытая функция гласка. I. Москва 1953. § 5, § 20*)、この *i*・*e* は調音的には中舌音であつた。従つてフィンランド語 *nela* (船尾の櫂、櫓) はもと **nela* であり、*leuka* (あご、下顎) は **leuka* であり、そして *kita* (咽頭) は **kita* であつて、この *i*・*e* の音は今もなおバルト・フィン諸語の若干の方言にもそれぞれ *i* と *e* とともに、それらから區別せられつつ存在し、しかも母音調和に參加しているのである (Karjainen 前掲書、二九三頁)。*i* を中性母音とするトゥングース諸語においても、方言的にはなお *i*・*i* の區別を残すものがある (Les langues du monde, 1952, p. 392)。すべて *i* を中性的にあつかうものは、もとの *i* と *i* の區別を拭い去つて、これを *i* のひとつにまとめたものであつて、さきに見たごとく上代日本語の文献にあらわれる *i* の不安定なすがたは、この移行の途上の様相を部分的に示すと考えることができる。従つて「ツキ」は *tuki* として、第一、第二音節がともに男性母音を示しつつ A 域的に結合し、B 域の「とき」は *to:ki* として全體的に女性母音としての結合を示す。すなわち、更に古い段階においては、*i* は、*i* と對立しつつ、純粹に女性母音であつたと考えられるのである。單なる中性母音ではなかつたとしなくてはならない。その中性化は、*i* の喪失もしくは *i* への吸収による第二次的な様相への移行の結果であり、ここに /I/ が現出したのである。

この見地からすれば、「クチ」(口、「久知」)なる結合において、第一音節の男性母音 *u* と單位的に關係する第二音節の母音は、當然、もともと、*i* として、全體は **kui* であつたと想像せられる。これについては、「カミ」(神)、「ツキ」(月)が合成の第一語となるとるとき、それぞれ「カム」・「ツク」(カムカゼ、ツクヨ)となり、「クチ」も「クツ・ツ」

(口輪、轡、天治字鏡) となることが思い合わせられる。とすればこの單位は全體としてA域の語詞である。これに對するB域の語としては「こと=バ」(言)、すなわち、**ko-to-ba* があらわれる。「事」の「こと」もまたこの「こと」(言)と同じものであつたのは、いうまでもない。萬葉の東語にはまた「ことバ」に對して「けと=バ」*ke-to-ba* の形もあらわれる。これもA域のクチに對するB域の語であつた。

上代日本語には屢々「こも=リク」(隱)の語があらわれる。この「こも」はB域の構成である。しかしA域の構成による語としては「クミ=ド」*kumi-do* (隱處)の語がある。二つは意義的に同部類における對立語と考え(感じ)られたのである。

かように本來的には、*i*は調和における女性母音であつたとするならば、「ヒと」(一)と「フタ」(二)の意義的對立もよく理解することができる。さきに掲げた八世紀に残存する母音の組織が成立するよりも、更に以前の體系においては、*i*は*i*とは別に、分れて明瞭に前部母音(女性母音)の領域のものであり、「ヒと」は「フタ」に對して全體としても明確に對立することができたのである。同様に「ミ」(三)と「ム」(六)の對立的關係も、B域對A域の關係において、よく理解することができる。「よ」*yō* (四)と「ヤ」*ya* (八)についてはいうまでもない。

なお、「ヤミ」(暗、「也末」)に對して「よも」(黄泉、「よもツ=」)と「よミ」(黄泉)があり (*yami: yōmi, yōmō*)、
「とも」(伴)に對して「ツマ」(夫・妻)がある。「こと」(異)に對しては「カタ」(一方、左右不整)があり、また「ひ」*hi* [s*i*] (火)と「ヒ」*hi* [s*i*] (日)の二つも、本來、別語(別根の語)ではなく、同一の/FI/の古いA・B領域による對立的分化の結果と思われる。同様にAの「カール」*ka-ru* (刈)に對して、Bの「こ=ル」*ko-ru* (伐)があり、またキール(切)がある。「との」*tono* (殿)に對して、やや時代が下る倭名抄卷十に「坐賣物舍」としてあらわれる「タナ」(店)をも、Bに對するAの構成形として認めることができるであろうか。

「問う」・「訪う」を意味する語は、上代に「トフ」・「とフ」として甲乙二形があらわれる。しかしその用例を記・紀・萬葉について整理するとき、「訪う」に關しては乙類による「とフ」が多い（有坂、音韻攷三三頁）。ことに古事記においては三例ともに「とフ」である。このB域母音による動詞に對して、その名詞形としてはA域による「タビ」または「タビ」（旅）があらわれる。さきに「こもリク」に見える動詞語幹「こも」に對して、われわれはA域母音による名詞「クミド」を見ることができた。「とフ」に對して「タビ」があらわれるのは、全體をA域化することによつて、動詞「とフ」のB域的との對立關係を更に強調したのであろうか。「タビ」はiのiへの吸收による第二次的な形である。「訪^タフ」は四段に活用する。従つて一般にその名詞形を派生する連用の形は清音「ヒ」であつて濁音ではない。ここに濁音を示す「タビ」・「タビ」の語形の成立については、なお問題は残る所以がある。

動詞「取る」もまた上代に「トル」・「とル」の二形がある。この語の基本部と交渉すると考えられる「テ」（手）の母音は、A域の「トル」から見ても、Bの「とル」から見ても、兩者の中間線a—iの上に來ている。これは、さきの圖式のみによるかぎり、その母音を男女いずれの性の母音に屬せしめるべきかを決定することができない。しかし「テ」には別に合成形としてあらわれる「タ」の形がある。たとえば「タナヌエ」（手之末）・「タナマタ」（手之俣）・「タビ」（手火・炬）、等。そして他方、「サケ」（酒）に對して「サカ」があり、「タケ」（竹）に對して「タカ」があるのを見れば、類推的に、甲乙の區別をすでに書寫の上にあらわすことのできなかつた「テ」も、本來、乙類の假名による「て」で寫さるべきものであつたと考えられる。しかも別に、「タカイチ」↓「タケチ」（高市）・「ナガイキ」↓「ナゲキ」（長大息・嘆息）があるのを見れば、「て」に對する「タ」こそ、その基本形であつたとしなくてはならない。「タ」には母音/a/がふくまれる。aの結合線は一般にa—o—uにおいて、もつとも鮮明である。従つてすでにひずみの加えられた八世紀の圖式より以前の、より徹底した圖式を、さきに見たウラル諸語におけるごときその調

和の原型から推定すれば、そこにおいてこの a は、まさに男性母音に組み入れられるべきものと考えられる。とすれば意義範疇の対立上、類推的に、その動詞は對立的に女性母音による「と_レル」が文献以前の原形であつたとすべきであろう。

A・Bの二域による意義的分化は、「ア_二ドモ_一フ」（率）と「ア_二ツム」（集）の間にも見ることが出来る。

「ハツ」（初）と「ホツ」（上端の、「ホツ枝」）もまたこれにあたり、この二語の「ツ」は「天ツ」の「ツ」であつて、二語とも「ハ_二ツ」、「ホ_二ツ」と分かたるべきもの、そしてその「ハ」・「ホ」はそれぞれ「端」・「尖」を意味し、ともに「邊」を意味する甲類の「へ」（そのところ）および乙類の「る」（その近まわり）に對立的に對應し、これに萬葉に散見する「ハマ_二び」（濱邊）の「ひ」を加えるならば、この五つは、

a 男性的（A域的） ハ_二（端） || ひ（邊、そのところ） ホ_二（上端）

b 女性的（B域的） || へ（邊、そのところ） || る（邊、その近まわり）

となつて、三つの接尾要素のうち、bの中の二者の意義的區別が、繊細ながら明確なのに對し、却つてaの「ひ」と「と」の區別が一般に曖昧になつて來る。事實、「ひ」は「ハマ_二び」・「カハ_二び」・「ヤマ_二び」・「カハ_二び」と用いられて萬葉においても、bの「カ_二ハ_二び」（岡のそのところ）、「カハ_二び」（川のほとり、近く）と區別することができない。

ところでここに注意されるのは、「ひ」が萬葉ではA域の構成による語のあとにつづいて、それと密接に結ばれていることである。思うに曾ての母音調和の現象は密接に結ばれる接尾的な要素（ここでは小辭すなわち助詞）にも貫透して、その本來の活動範圍を保持した名残りをここにとどめていたのであつて、「ヤマと」や「と_レ」、また「ヤマ_二の」に對しては母音 e・i による「へ」・「る」がつづき、「ヤマ」・「カ」のごとき男性母音による構成單位のあとには母音 i による「ひ」がつづいていたのであろう。——ちなみに右の「る」は、「ウ_二る」（上）にあらわれるそれと同じものであつて、「ウ_二る」が二つに分析されることは「ウ_二レ」（木末）との比較によつても知ることが出来る。この「レ」は「こ_二レ」

(此)・「そレ」(其)・「アレ」の「レ」にあたり、「こ」・「そ」・「ア」が指示代名詞の語根的部分として取りはずし得ることはいうまでもない。一方この「ウ」は「上、表面」を意味したものと考えられ、それを含む形には、別に「ウク」(浮)・「水の」表面上に居る・あがる)がある。「ウ」は古い合成語として「上のあたり」の意義をもち、合成語であつたために、前部(女性)母音の \ddot{o} がすぐれて後部(男性)的な母音 u と接合して、一見、本來的な結合単位を構成しえたのである。

密に結ばれた接尾的な小辭に母音調和の現象が及ぶ例は、小辭もしくは助詞「の」についてもみとめられる。八世紀までに「の」は一般化して、當時の言語に能動的に活動していたものはもつぱら「の」であつたが、しかし古くは、「ミナ」(ト)、「水之」(門)、「マ」ナ(カヒ)、「眼之」(交)、「マ」ナ(ブタ)、「眼之」(蓋)、「タ」ナ(マタ)、「手之」(俣)、「ウ」ナ(ハラ)、「海之」(原)、「モ」ナ(ヒト)、「百之」(人)、「ヌ」ナ(ト)、「瓊之」(音)、「ナ」ミナ(ト)、「波之」(音)、「カム」ナ(ツキ)、「神之」(月)、「十月」の諸形があり、これらが固定した形で記憶的に八世紀に伝えられ、ここでは「の」にあたるものがひとえに「ナ」としてあらわれる。これに對して「こ」の(ハ)、「木之」(葉)、「ホ」の(ホ)、「火之」(穗)等がやはり固定した形として伝えられたが、ここでは「の」は母音調和的に、先行する乙類の母音 \ddot{o} に密に接して、みずからも \ddot{o} の母音をもつてあらわれている。「ホ」の「ホ」の語の第一音節が、もともと乙類の \ddot{o} 母音をふくむ音節であつたことは、「き」(木)に對する「こ」の「*ko-no*」(木之)の関係からも類推的に理解することができる。さきに述べたごとく、ホの假名にはすでに甲乙の區別があらわれることがなかつたのである。のみならず、一方、純粹、本來的に甲類的な「ホ」に對しては、當時、言語習慣的に「ッ」(ホッ)「上端の」があらわれ、この「ホッ」のすでに存在することが、ホの二類の區別を失つた當時、「ひ」(火)に對しての「ホ」、すなわち「ほ」には「ホ」の「ッ」を用いしめ、純粹に甲類的な「ハ、ホ」(端、上端)に對しては「ッ」による「ハッ」・「ホ

「ツ」を使用せしめ、以後、「ツ」は「の」とともに、漸次、無差別的に一般化して行つたものと思われる。

この「ツ」も、しかしまた、古い小辭であり、密に接する語詞につづいて、みずからもまた、母音調和的現象を示していた事實を、時に見出しうることもある。

「男・少男」を意味する語には、「ヲとユ」とともに、また「ヲのユ」もあらわれる。この二つにおける「ヲ」は、「少」とも、また「雄」とも、取ることができる。いずれにしてもその音は、音韻的にむしろ /wo:/ であつたことは、これにつづく「之」の意味の假名が、すべて乙類になつてゐることによつて知ることができる。この /wo:/ につづく「と」は意義的に「の」にひとしく、また右の「ツ」にひとしい。とすれば「と」と「ツ」は調和的に母音交替を示すところの本來同一の小辭であつた。因みに、「ヲと」と「シ」（前年、昨年）の「ヲと」wo: は、「ヲチ」wo: (遠、彼) であつて、「ヲと」yo (小男) の「ヲと」とは一應別語である。「少男」の「ヲと」は離脱的に固定して「弟」の語を生んでゐる。

このように先行する體言に密接に結合した小辭は、またその體言の母音の影響下に母音調和を示してゐたとすれば、「こ」
「ヌレ」（木）の「末」の「ヌ」にふくまれる母音「ウ」は、少くとも八世紀までに、如何様に發音せられたのであろうか。「ウレ」の語意識が強いために、飽くまで「ウ」と發音せられたのであろうか。または先行する母音からの口蓋化をうけて *ü* に近く發音せられたのであろうか。この *ü* は單にいわゆる音聲的現象（いわゆる *phonetische Erscheinung*）
にとどまつて、音韻を構成することはなかつたのであろうか。また一般に前代の母音組織において、*ü* が存在することはなかつたのであろうか。同様にたとえば、「ミ」*mi* ナイトの「ミ」が會ても「み」でなかつたとすれば、それにつづく「ナ」は、あくまで音聲的にも *a* であつて、先行する口蓋音の影響下に音聲的現象 *ä* をあらわし、更に音韻を構成し、*ä* として組織中に存在したこともなかつたのであろうか。これらはさらに今後の問題であり、問題は八世紀より以前の前代の母音組織にかかつてゐる。

問題をもどして、A・Bの二領域、またはその前代の更に徹底していたと想像せられる母音組織において、前後部二類の領域間にわたる母音交替を示す語の間の對立を見るならば、たとえばなお、「ハラニ」(散り散りに)に對して「ホロニ」(ばらばら鳴るさま)があり、また「よヒ」(宵)と「ユフ」(夕)がある。「よヒ」は日の暮れ切つていまだ中夜に及ばぬ時點と時間を指し、「ユフ」は日の暮れがけである。「よヒ」はまた古典に「ヨヒ」としてもあらわれる。にわか決定することはできないけれども、右の意義的對立と母音法 (Vokalismus) より考えてユフ (A) に對する「よヒ」(B) が正しい形かと考えられる。「ミチ」*mi* (路・徑) と「マチ」*mati* (小徑による田の區劃) の關係もこれにあたり、手前の「こ」(レ) (此) に對しては向うの「カ」(レ) (彼) がある。「のム」(飲) に對して推古紀の「ナム」(嘗) があり、「このム」(好) に對して「カナフ」(叶) がある。「イール」*iru* (射) のBに對するAの「ヤ」*ya* (矢) もA・Bの結合單位的對立に入れることができる。單なる「日」よりも、むしろ押し移る時間や日晷を意味することが萬葉の作歌によつて想像される「け」(日) が (卷四「長き氣をかくのみ待てば」、卷十三「草枕此の旅の氣に妻さくべしや」等)、ただ助數詞として「イクカ」(幾日)、「イツカ」(五日)、「フツカ」(二日)、「モモカ」(百日) のことき構成にあらわれるにすぎない「カ」(日) と意義的範疇において、B對Aとして對立する現象も、また同様に理解することができる。

ここに注意すべきことは、「け」と「カ」に見られるように、母音 \ddot{e} とaが對立する現象である。八世紀に残る母音組織の圖式においては、二つはともに中心線上に位してその結合乃至對立關係に關して矛盾するところはない。しかしその圖式以前の、より嚴密に前後部の母音の對立を強調する前圖式においては、aはまた \ddot{e} とも對立したのである。われわれは先述のごとく、 \ddot{e} がきわめて廣いエ列の母音、わずかに口蓋化を経た母音として、 \ddot{a} として、理解することができる。これはまた「タカニイチ」↓「タケチ」(高市)、「ナガニイキ」(長息) ↓「ナげキ」(嘆) の推移の關係によつても知るこ

とができる。しかるに \ddot{e} には、「け」・「カ」(日)のごとく輕微にもせよ、意義的對立もしくは分化を伴つてあらわれる本來的な \ddot{e}_1 と、aとiとの熔合よりなり、aと意義範疇的對立を本質的に持つことなしにあらわれた第二次的な \ddot{e}_2 とがあつた。従つてまたこの \ddot{e}_2 は、音韻として本來B域的な性質にも拘らず、十分にA域的母音と單位的に結合することができた。従つてたとえば「サけ」(酒)は「サカ」、「タけ」(竹)は「タカ」としても、意義的對立をもたらしことなしにあらわれることができ、きわめて廣い \ddot{e} (ä)によるこの音節「け」は、第二音節において意義的對立をよぶものではなかつた。「フネ」(舟)↓「フナ」、「ムレ」(群、村、岳)↓「ムラ」の關係も同様に理解することができる。ともに「ネ」および「レ」も、本來「ね」・「れ」とせらるべきものであつたが、八世紀にはその母音を甲乙に區別してあらわす假名の使用わけがなかつたのである。

以上を通じて八世紀に残る(または、あらわれる)日本語の結合單位の構成は、一應先の組織の圖式に従つて行なわれていたけれども、しかしAB二つの領域を貫いて行われた母音交替の現象を通じて、なおその前代の組織と圖式を窺い知ることができ。これによれば、母音 \ddot{e} (ä)・e・iは \ddot{o} ともに前母音部(女性母音部)を構成し、母音aはo・u・iとともに後母音部(男性母音部)をなすものであつた。そのうち單位的に後部母音と結合し、また意義的對立を伴うことなくaと交替し得た第二音節のエ列の母音は、本來 \ddot{e}_2 であつたと考えられる。「ナる」(苗)↓「ナハ」、同様に「イネ」(稻)↓「イナ(=ツビ)」(米粒)、また「タテ」(楯)↓「タタ(=ナミ)」(楯並)、等(タテは立ツ、下二、の連用形からの形、しかし甲乙の區別をもつカ・ハ・マ行下二段動詞の連用には常に乙類の假名があらわれる)。

圖式のA・Bの兩域、および更に古く存在してこの圖式の起源となつた前代の圖式における後部・前部の母音の二つの領域を通貫しつつ、意義的範疇の移行を伴つてあらわれる母音交替を、「遞音」の現象といふことができる。

β、A内およびB内の交替

「送音」

以上のA B間を貫く母音交替に對して、AおよびB域のそれぞれ内部における交替には、原則として、意義的範疇の對立がない。この交替を私は、さきの遞音に對して、「送音」と名づける。

「ムラ(=クモ)」「叢雲」と「モラ(=クモ)」の「ムラ」・「モラ」はともにA域の構成である。そしてここには文體論的な價值以外に意義的對立はない。同じように、「カブ(=ツチ)」「頭槌」と「クブ(=ツチ)」「カミ」(神)と「カム(=カゼ)」「神風)、「ウツツ」(現)と「ラツツ」、「ナナ(=ヨ)」「(七夜)と「ナヌ(=カ)」「(七日)」、がある。また「ひウ」(聶う)に對する「ハグ」(剃ぐ)も、A域内の交替として考へることが出来る。語末音節「グ」による形をここにあげたことについては、「タグ」(食)に對して古語に「タグ」(食ぐ)の形があつたことが考へられる。「ヲノノク」と「ワナナク」(慄)との間もただ文體論的な差異であつて、意義的範疇に差異はなく、「ツナ」・「ツノ」・「ツヌ」(綱)「栲」(綱)は同一であり、「ツキ」(月)と「ツク(=ヨミ)」「(月)「讀」)、「ドチ」*doti(達)と「タチ」*tatiも變りがない。「アサ」(朝)と「アス」(明日)もここに入れて考へられるであらう。これについては意義論的にドイツ語 *mor- en* に對する英語 *to-morrow* などを考へ合わせることが出来る。*morgen* と *-morrow* は同根の語である。「夜が明ければ、朝になれば」は、ただちに明日となるからである。この種の現象を示す言語は多い。

B域、または、前代の母音組織における前部母音の領域(「前B域」)中に行われた交替については、萬葉にも見える「黄シム」(黄色に染める)の「シム」(染)と「そム」(染、卷二十「色深く夫が衣は曾米ましもを」)があり、「とキ」(時)、「とキ=ハ」(常盤)と「とこ」(常)、「とこ=よ」(常世)との關係もB域または前B域内における母音の移行もしくは交替によつて行われ、「ニ」(荷)と「の」(=とリ)「(荷持ち)、「(ミ=キ)「(御酒)と「(サ=)け」(酒)も同様にして意義的な差異がない。「ケ=フ」または「け=フ」(今日)は名詞「フ」(日)を含む合成語である。この「ケ」または「け」は「こ=の」・「こ=レ」の「こ」と同域に屬して、ともに「此の」・「今」を意味し、事實、古事記および紀

の允恭記にあらわれる「こぞ」(去鐘)は「今夜」を意味しているのである。「けさ」(今朝)もまたこれに入れて考えられるであらう。一方、「こぞ」は萬葉に「去年」の意義をになつてあらわれる。この「こ」は「キ」の「フ」(昨日)の「キ」、「キ」(昨日)の「キ」と迭音するものであつて、ここに、「こ」——「け」・「ケ」の類(「今」)と「こ」——「キ」の類(「昨」)とが、ともに同じB域または「前B域」中において意義的範疇を異にしてあらわれるように見える。しかし後者の「こ」——「キ」は、すでに「こ」と「キ」の交替によつて想像せられるように、本来、動詞「來」のそれぞれの形であつて、動詞「ク」には今日の意義での「來る」のほかに、「往く」・「去る」の意義があつたことは、紀卷八、仲哀紀に「何處將去(將去「毛天久雷」)白鳥」の用法があることによつて知ることができる。萬葉卷一「倭には鳴きてか來らむ」の「來らむ」も、この歌の詠まれた位置(吉野)と「倭」(大和朝のみやこ)との地理的關係を考えるならば、やはり「去る」・「行く」の意義をもつことは明らかである。従つて「こ」——「キ」の「こ」は「來」(去)であり、「こ」——「ケ」・「け」の「こ」は「此」である。併せて「こ・ケ・け」は「此」の迭音であり、「こ・キ」は「來」をめぐる迭音である。二つの類はそれぞれ別語であつて、同域内の迭音による意義的範疇的分化による結果の形ではなかつた。

B域または前B域に屬する語にはまた「け」(毛)がある。この語はまた「カ」、あるいは「カ」として、合成語「シラガ」(白髮)にあらわれる。「け」——「カ」はB・A兩域にわたる母音交替であつて、一見、意義的範疇の轉移を伴う遞音現象のごとくにみえる。しかし「け」と「カ」の間には意義的分化もしくは轉移と考えられるべきものはない。二つはただ「サヶ」(酒)と「サカ」、^{タケ}「タけ」(竹)と^{タカ}「タカ」の關係にあるにすぎない。これによつても一般に乙類の母音とがaに近い廣母音であつたことが想像せられ、併せて、前代における母音調和の現象は、その要素が密接に結合しそのまま固定して残された合成語において、第二要素の名詞にまで管到して傳えられたことが想像せられる。一方、上代の

下二段活用に連用形の母音*i*が、起源的に、語幹末尾母音*a*に、すべての動詞に大體一般的な連用形の母音*i*が添えられて成つたものとすれば、「タカ^カ」(竹)に對する「タ^ケけ」、「カ^カ」(毛・髮)に對する「け」も、それぞれ原形*/a/*に別の*i*が添えられて成つたものかと想像せられる。そしてこの*/i/*は、「若^{ワカ}子イ」に見える「イ」とひとしく、もとは指示詞であつたことが考えられるとすれば(泉井、「言語構造論、東京・大阪、一九四七、九九一〇〇頁)、「イ」は後置定冠詞的にはたらいで、先行する名詞を獨立的に固定せしめるものであつたらうか。後置冠詞はヨーロッパにおいてデンマーク語、スウェーデン語等の北歐語、またルーマニア語にあらわれ、マライ^イ・ポリネシア諸語においてはセレベスのマカッサル語、スマトラのガヨ語にあらわれる(泉井、「マライ^イ・ポリネシア諸語」〔世界言語概説、東京、一九五四〕一〇六〇頁)。古事記中卷(神武)、長歌に見られる「オヒシ」(大石)のごとき語は、大野晋によれば、もと**o:fo:si*であり、ついで**o:fi:si*となつたと考えられる。これをもし正しいとすれば、*i*にはまた結合*oi*より來たものがあることになり、「木」を意味する「き」*ki*も、「こ^コ」の「マ」(木の間)・「こ^コ」の「エ」(木の枝)のごとくただ合成語の第一要素として残る「こ」*ko*を原形として、これを*i*によつて定置した形と考えることもできる。「こ^コ」(木)はまた「け」と同域的の交替をなし(「御木」・「真木^マばしら」)、元來、B域または前B域の構成に屬する語である。並行的に、「ひ」(火)もまた、もとはおそらく乙類の音節に屬してただ合成の第一要素として残る「ホ」(前述の「ホ^ホ」の「ホ」)を原形とする語であつたと考えられる。

一方、「サ^サけ」(酒)の「け」は、すでに「け」として一應固定してから、第二次的に改めて「ミ^ミキ」(御酒)の「キ」と同域的に迭音することができた。「サ^サけ」の「サ」は「サ^サみ」(さ身)、「サ^サエダ」(さ枝)、「サ^サころも」(さ衣)、「サ^サヲシカ」(さ牡鹿)の「サ」である。

さきに私は、後部母音の音節につづき、これと單位的に結合する音節の*e*列の母音が、もし*a*と交替しうるならば、その音節をあらわす假名に甲乙の區別が有ると無しにかかわらず、その母音は元來*i*であつたと見ることができるとの意味

のことをいつた。しかし「マめ」(豆)・「カめ」(龜)・「アカめ」(魚名)・「クチめ」(魚名)・「スズめ」(雀)等は、その「め」が「マ」となることがない。それは、「メ」が愛稱または貶稱の古い接尾辭であつて、先行要素と單位的に結合するものではなかつたからである。「こめ」(米)も「こマ」としてあらわれることがない。「イナツび」(米粒、倭名抄)の形はあつても、「こめ」についてはただ「こめツび」(米粒)だけがある。とすれば「こめ」の「め」は右の「メ」とひとしいものであらうか。

なお「ニ」(瓊)はA・Bの中心線上の*i*により、「前B域」的には前部母音の領域に屬すべき音節による語のように見える。しかし、後部母音的な「ツき」(月)・「カみ」(神)の「キ」・「ミ」がそれぞれ「ツ」・「ク」・「カ」・「ム」としてあらわれるのに並行して、「ニ」は「ヌ」・「ナ」と「瓊の音」のごとく「ヌ」としてあらわれるの見れば、この「ニ」の母音はむしろA域の*i*であつたと思われる。

四 前代の母音組織

さて先述のように、乙類の母音*ö*をふくむ音節と單位的に結合する音節のオ列母音は、常に乙類であつた。オ・ホ・ヲのごとく、八世紀において甲乙の區別を假名の上にあらわすことがすでに出来なかつた音節のオ列母音も、ここでは少くとも前代において、乙類の*ö*であつたと考えられる。従つて「ヲそ」(輕率)は**o:ö:*であり、「ホそ」(細)は**fo:ö:*であつた。*ö*は*o*と單位的に結合しなかつたのみではない。すぐれて後母音的な*o*ともまた結合はまれであつて、「クシろ」(釧)、「ムシろ」(席)のごとき、*i*を中性として*o*—*ö*による結合は、八世紀に残存しえたけれども、その成立の事情はおのずから別に二様の分析によつて考えられ得ることもすでに述べた。事實このように*ö*と*o*の結合は残存するものもきわめて乏しく、「とブサ」(朶、または鐘)のごとき語も、一方に「とツサ」(鳥總)と分析して合成語的に説明せられ

ているほどである（萬葉卷三の三九一歌）。しかしこの語の意義の考證は山田孝雄「萬葉集講義」三の六七—六七七頁を參照せられたい。——なお「ヤシロ」（社）も「ヤシロ」（屋代）等として説明することもできる。

ところで、石川龍鷹は右の「ヲそ」（オホヲそどり）を、おそらくは誤つて、「ウそ」（嘘言）としてかかっているのであるが、もし假にこれを「ウそ」とすればその「ウ」の音は果して*u*であつたであらうか。「ヲそ」も*o:ō*と考えられる。*o*よりもむしろすぐれて後母音的な*u*がただちに前母音的な*o*と結合することは、まことに考えがたい。「ウそ」は、母音調和の現象がはたらきとしてはすでに停止し、その痕跡として記憶的固定的にただ書寫體系において維持せられた八世紀の母音法においては或いは存立しえたであらう。しかしその成立し、その成立に調和の現象がはたらいていた前代においては、八世紀においてさえ最もすぐれてB域的な*o*と、八世紀においてさえもつともA域的であつた*u*とが、ただちに單位的に結合したとは考えがたい。もしこの「ウそ」が前代に成立していたとすれば、——そしてその*o*は動かしがたいとすれば——その形は、曾て、**uiso* の*i*とく、*u*はむしろ前母音的な*ü*であつたかと考えられる。さきに「こヌレ」（木末）が「木」の「ウレ」からなる語であつて、その全體が合成語ながら一つの全體として單位的にかたく結合していたとすれば、そこにあらわれる「ヌ」は、或いは**nyō*であつたかと考えたことがある。同じことは「こヌミ」（地名）の「ヌ」についても考えることができる。紀の推古紀には人名「久僧」があらわれる。もしこの假名が正しいとすれば、この人名は「クそ」であり、その「ソ」が動かしがたいとすれば、「ク」はやはり**kyō*でなくてはならなかつたと思われる。一方、「屎」の意義をもつて神代紀には「俱蘇」の語があらわれる。「俱蘇」は「クソ」である。二つの音節はともに後部母音でありA域の母音をふくみ、この單位の結合關係に疑問はない。しかし倭名抄卷二には「久曾」としてあらわれる。これは、八世紀的な假名遣いに従えば、「クそ」でなくてはならない。一體にア行ヤ行のエ列音の混同を除けば正確といわれる倭名抄の著者にも、この點に關して古音の記憶に誤があつたのであらうか。或いは別に傳えられた當時

の音のみならず「クソ」も正しいとすれば、その形は、正確には *kuso: でなくてはならない。のみならず「クソ」(「クそ」)は、上代にもあらわれる「クサ」(腐・臭)に關係する語とせられる。とすれば意義類の範

疇的對立上、A域または「前A域」的な「クサ」に對して、B域的な *kuso: が本來正しく、固定的に八世紀にのこされた「クソ」の原形はもと、「クそ」であり、ひいて、*kuso: であつたと考えられる。「シヌ」(忍)は *sinu: か *sinu- のいずれかであつたと思われる。

以上すべての母音交替的事實を綜合し、その成立の基盤となつた母音組織を考えつつ、右のiiに關する事情を考慮するならば、八世紀に残るものより更に以前の、「前代の母音組織」は、上のごとくに考えることができる。

廣母音	*ä(ä)	*a	
中廣母音	*ö	*e	*o
狭母音	*ü	*i	*u
	圓唇的	非圓唇的	非圓唇的
	前部母音 B	後部母音 A	

母音の交替關係を通じて再構せられたこの母音組織が、全體として、ウラル諸語、および、アルタイ諸語における古い、前代的な、母音組織に近づくもののあるのを示すのは事實である。しかしこの事實が、直ちに、日本語のこれらの言語に對する系譜關係を暗示するもの一つとせらるべきか否かは、なお將來の問題としなくてはならない。

註 Steinitz, Wolfgang: Geschichte des ostfjakischen Vokalismus. Berlin 1950. Ramstedt, G. J.: Einführung in die altaische Sprachwissenschaft. II. Formen-
Ostfjakische Grammatik und Chrestomathie. Leipzig 1950. Geschichte des lehr. Helsinki 1952 (第一卷は未刊)。A Korean grammar. Helsinki 1939.
finisch-ugrischen Vokalismus. Stockholm 1944 (Acta Instituti Hungarici (p. 25—))
Universitatis Holmiensis, Series B, Linguistica 2] (これは絶版で未記である) Poppe, Nikolaus: Khalkha-Mongolische Grammatik. Wiesbaden 1951. Intro-
duktion to Mongolian comparative studies. Helsinki 1955.
るけれども、その行論と結論との大體は想像するに過ぎない。